

金丙鎮

韓国軍保安司令部での体験

保安司

ポアンサ

核時代四三年（一九八八年）六月二〇日初版第一刷

著者——金丙鎮

装幀者——鈴木一誌

発行者——和多田進

発行所——株式会社晩聲社

郵便番号——〇一——東京都千代田区神田駿河台三—一 山崎ビル 振替——東京六—五〇六九六

電話——〇三—二五五—〇三〇／四〇一四 FAX——〇三—二五五—〇〇一九

用紙——株式会社共和洋紙店

印刷所——株式会社フクイン

製本所——ナシヨナル製本協同組合

定価——一三〇〇円

0036-880174-6999 Kimu B. 1988 ©

キム・ビンジン——一九五五年神戸市生まれ。一九七三年関西学院大入学。七六年同大中退。

八〇年三月韓国の延世大編入。同年七月九日保安司令部に連行される。八三年二月同大卒業。

同年三月同大大学院入学。三星総合研修院日本語講師採用。八四年一月保安司令部に「特別採用」。

八六年一月三一日保安司令部「退職」。同年二月一日日本へ。

●奥付の年号を「核時代」とすることについて——一九八七年二月以降に刊行しました小社出版物の奥付記載年号には「核時代」が使用されています。「昭和」的年号の拒否と私たちが生存している今日の状況をふまえ、ジャーナリズムの果たす役割を忘れぬための思いをこめております。

保安司

韓国国軍保安司令部での体験

金丙鎮

ホアンサ

ルポルタージュ叢書 36

晩聲社

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

保安司

—— 韓国国軍保安司令部での体験・目次

I 1983年(上)

連行／西水庫ホテル／韓国国軍保安司令部／ある懐柔工作／奇想天外な世界への闖入／
在日韓国人のひとりとしての過去／「第一次調査」のはじまり／眠らせない時間／シンシムハダ／
妻と子どもへの想い／木塊による殴打の感覚／VIP室／
祖国は何が罪であるのかを語ったことがあったか／日本にはいつさい連絡するな／高柄天の判断と決断／
妻のすすり泣き／奪われたスポーツ／
クラウンホテル／陰謀／公訴保留／間諜罪成立のフルコース／軍事独裁の法的表象／
「包摂」／不気味な音／憎い人にと餅は余計に……／小型電気拷問機／品物にすぎない在日韓国人／
死とは何んだ／スパイ報道／調書作成という名の取り引き／
在日同胞の心の葛藤をだれが裁けるか／全斗煥と金日成にかかわる夢想／
奇妙な注文／特別採用／泣き落し作戦／二個網一網打尽／
派出所長の訪問／狂気の陰謀をくりひろげる人たち

II 1983年(下)

西水庫からの呼びだし／駄作／スパイC氏の前歴／「人間白丁」／
C氏に加えられた暴力／「イエス」とだけ言えばすむ作業／不思議に明朗な光景／意味のない嘆願書／
お払い箱／新しい捜査分室／L君の陳述書／悲願の犠牲者・L君／
デッチ上げられる過程／不気味な男／奇妙な会議／見てやる！

Ⅲ 1984年

国軍第七五九部隊「三処」課／紳士協定／研修／「原爆工作」／「テラス工作」／情報分析班の仕事／「諜報は嘘だ」という常識／徐兄との再会／ウイハヨ／留学生狩り／「嬢の場合」／想蛇病／翻弄される心／晝二才が広げた風呂敷／三係と五係／くるべきものがきた／荒唐無稽なストーリー／はじめた「スパイ」狩り／朴龍浩の意気込み／野獣／よし、できた！／趙一之君の場合／デッチ上げの構造／「枚舌の約束」／国賓を「坊主頭」と呼ぶセンス／「ゲーセツキー」／心理戦／西大門拘置所へ／趙一之君の家族との出会い／「嬢と高英子君の「訓放」／解放歌／申東基の失態

Ⅳ 1985年

ある諜報報告／三時間だけの日本／コイルが性器に……／柳氏の「自叙伝」／人間バーベキュー／わいてきた勇氣／法廷の証人として／柳氏の涙／冒険／忠誠工作／柳志吉氏の決意／拘置所の中で／くつがえされた「自白」／狸と狐の関係／〇でも×でもない△／帰ってこいよ、釜山港に／「ナラク工作」／保安司の醜態／言論弾圧／公訴保留の満了がやってきた／処長のサインはとった／保安司を祖国の地から葬り去ってやる！／負けるが勝ちだ／私は決して沈黙しない

あとがき

1
1
9
8
3
年
(上)

修学生活の充実感と家庭生活に幸福感を覚えだしたころだった。

生後二カ月半のはじめての子どもの顔を思い浮かべながら、三星総合研修院日本語講師の同僚に誘われて鷺梁津水産市場に立ち寄ったあと、送迎用の車を先に帰らせた私は二十五番の路線バスを冠岳山を見上げる奉天橋で降りた。

長男を出産してあと、そのまま子育てに追われることになった妻のために、明日の日曜日には明洞界限にでも出てみようかと大学院での生成文法の受講準備をどうしようかと考えながら、そして、はじめて親になった者が持つ子への執着に足を急かされて、その日の帰路はいつにも増して幸せな逍遙に思えた。開襟シャツの下で、ランニングは汗を吸えるだけ吸いつくしていた。

シャワーを浴びたい。家に着いたらまず、そのことから始めようと思った。

わが家に行き着く最後の路地道を曲がったときだった。私の進行方向に向かって左手の小路に一台のポニーⅡ（韓国産乗用車）が、人の往来を妨げるほどに置かれてあった。特権階級への羨望から庶民が命名した「自家用族」がこの家に用があるのだろうか。好奇心に押されて、私の目は自然とこの車を凝視していた。

瘦せてはいるが筋肉質のＴシャツを着た男が、濃緑色の車のボディに寄りかかりながら咥え煙草をしている。その印象から察するところ、借金の取り立てか何かでわが街の住人のだれかに因縁でもつけにきているのだろうか。ポニーⅡの車内には別の男が二人座っていた。決して大らかとは見えない男の形相に加えて連れまわしていることが、彼等をして私に無頼漢を思わせるのだった。

私と目線がぶつかり合うと、唾え煙草の男はいきなり煙草を路上に叩きつけた。そして、それだけでは満足できないらしく無遠慮に私の行く手を遮るのだった。

「金丙鎮氏ですか」
キムビンジン

男の行動がまったく意外であつたことはもちろんだが、男が私の名を知っていたことに私は当惑した。あわてて「そうだ」と答えると、男は間髪を入れずに妙に突出したズボンの後ろポケットから何やらまさぐり出し、私の鼻先に突きつけた。

「司法警察官史、李徳龍」
イ・ドクリョン

どぎまぎした思いで私が読みとつた活字の上には、その男の顔写真が貼られてあつた。

「実は、あなたのよく知っている人が学生デモに加担しましてね。この近くの派出所で保護されているんですよ」

男の口調は立板に水で、深刻そうな表情をしながら言った。

だが奇妙な話だ。学期末試験も終わり、私の母校である延世大学は学生の姿もまばらで閑散としているはずだった。いわゆるデモシーズンではない。それに私が籍を置いている延世大学の大学院で大学院生がデモをしたという話はとんと聞いたことがなかった。少なくとも一九八〇年五月一日、光州事態勃発の直後からは――。

「だれなんですか、それは」

「あなたのよく知っている学生ですよ。この近くの派出所ですから、少し時間をいただいただけませんか」
ひよっとして、学部に通う後輩のなかでソウルに縁故者のいない地方出身のだれかが身元引受人

として私を名指ししているのだろうか。そんな考えが私の脳裏を一瞬よぎりはした。だが、変だ。どうして捕らわれた者の名を明らかにしてはくれないのだろうか。

「私が在日同胞だということは知つての上なんですか」

とつさに口をついてでた言葉は、なかば私の防衛本能のようなものだった。

「知っていますとも。手間は取らせません。身元確認さえしてくれば事は済むんです」

男は丁重な口ぶりだが高飛車な威圧感を与える態度は崩さない。

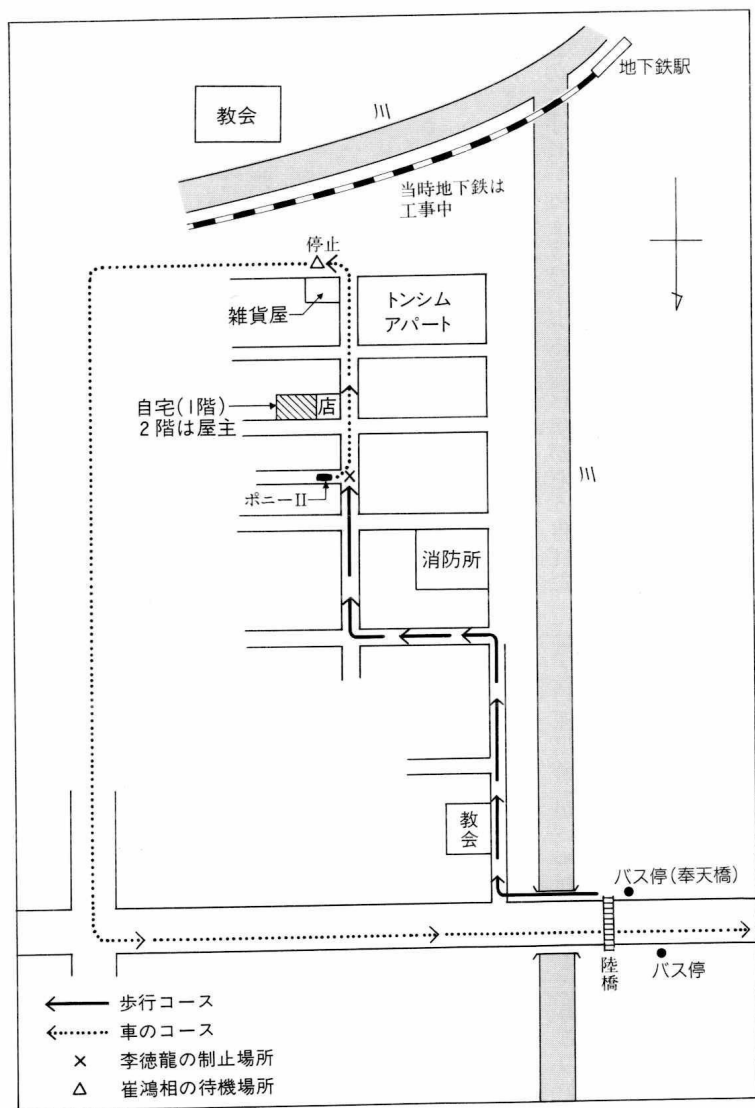
「わかりました。それじゃ、いちど家に寄つてからおともすることにしましょう」

「すぐに終わりますから、このまま行つて下さい」

「妻にひとこと告げてからでもいいでしょ。私の家はここのすぐ裏なんですよ。市場に寄つたおかげでいつもより帰宅が遅くなりましたし、それにいま買ってきた魚も冷蔵庫に入れて置かないと……」
私は私の主張の当為性を男に認識させようと思つてビニール袋の中のはま_ちを見せてはみたのだが、「近くだ、すぐ終わる」という言葉を男は繰返すだけだった。

家に立ち寄ることに固執するそんな私の話を聞いたせいだろうか、車の中に座っていたはずの男たちが、いつの間にか私の両脇に立つていた。私はそれがすでに予定されていた行動なのだと直感した。

自分たちが官憲であることを宣告している以上、私のささやかな抵抗はもう意味はなく、背中を押されながら私はポニーIIの後部座席に押し入れられた。李徳龍という身分証を見せた男と、彼と同年輩に見える若い男が私の左右に席を占め、車のドアから私を隔離していた。四〇代後半に見え



るもうひとりの男が車のハンドルに手をかけると、周囲をうかがいながら車を滑らせた。妻が玄関先に出ていてはくれないだろうか、私の姿を見てはくれないだろうかと私はわが家ばかりに目をむけたが、その甲斐はなく、わが家の玄関先には近所の子どもたちの姿さえもなかった。

舗装されていない道を砂ぼこりを上げてしばらく進むと、車はいったん停車した。運転していた男が窓越しにだれかの名前を叫んだ。そこには少し顔が浅黒の別の男が清涼飲料水を飲みながら立ちん棒をしていた。そして、その男は自分が呼ばれているのだと気づくと、ハンカチを持った片方の手で自分の頭をこつんと叩いた。

この道は、私がときおり違う路線のバスに乗ったときなどに通る道なのだ。その男は、ばつが悪そうにニタニタと笑いながら助手席に乗り込んだ。運転手と助手席に乗り込んだ男は、「本当に暑いですなあ」と、なにやら時候の話題をとりざたしだした。総勢四人のこの官憲たちは、それでも私にはいつさい言葉をかけようとはしてくれなかった。

「いったいどこまで行くのですか」

「着けばわかる。話は向こうで聞こう」

私の左手にいるもうひとりの若い男がそう告げた。「近くの派出所」がいったいどこにあるのかわからないまま、車が私の家からもう何キロも離れた第一漢江橋を渡ろうとしたとき、この連中の目的がデモ学生の身元確認ではなく、私自身だったのだと思えるようになっていた。

車は、橋を渡りきるとさらに北方へと走り、龍山ヨンサンの駅前で右折した。米軍のヘリコプター基地が左手に見えるのといっしょに、右手に鉄道の単線線路が現われた。人影はまばらで閑散としている。

車は東へ東へと進んだ。そこがもう目的地だったのだ。

小さな駅舎には「西氷庫駅^{ソビエンゴ}」という看板がかけられていた。一九八三年七月九日、土曜の昼下がり、こうして私は拉致された。

西氷庫ホテル

車は西氷庫の駅前交差点で、北へ——クラウンホテルの方角へと左折した。一〇〇メートルばかり行ったところで車一台がやっと通れるほどの右手の坂道へ曲がり、その急な勾配を車は登りだした。その道は入るとすぐに大きく湾曲し、周囲を石垣でかこっているため、さっきの道から入ると瞬時にして見えなくなるようになっていた。周囲の様子すらうかがいにくい高木にさえぎられた坂道を登り切ると、前方に大きな鉄壁門があった。もちろん、その中の様子は一向にわからない。

運転してきた四〇男が門前でクラクションを鳴らした。すると、門の片隅にある小さな窓から、だれかが目だけをのぞかせて闖入者を確認し、重々しく鉄の門は開けられた。黒ズボンにカーキ色の開襟シャツ、同じ色の帽子に人目を引くようにガンベルトを腰にぶら下げた青年が、かたくなな動作で挙手敬礼をしながら車を通過させるのだった。

中に車が入ってみると敷地は意外と広く、とてつもないほどに成長したポプラの高木で四方が囲ってあった。上空からでないかぎり、どのような位置からも中を見ることができないようにカモフラージュされているのだ。突き当たりにあるガレージには何台かの車が置かれ、車寄せを持つ煉瓦造りの建造物はちよつとした豪邸だった。

建物の正面玄関で車から降りさせられると、例の李という男に背中を押され、私は二階に案内された。外観の豪華なたたずまいとはうって変わって、建物は老朽化して窮屈さを感じさせる。廊下の一区画を仕切って何台もの電話機をならべ、事務所のように使っているところまでくると、そこには門番をしていた青年と同じ服装の青年たちがいた。

そこまできたとき、李が「その魚、ここの冷蔵庫に入れて置きましょう」と言った。まだ丁重な口ぶりで、私の手からビニール袋をもぎりとった。そして「心配しなくても大丈夫ですよ」となりやら邪魔くさそうにそう言うのと、李はそのままだこかへ行ってしまふのだった。

そのあとすぐにひとりの青年が厚手の下敷に挟まれた書類を持ってきて、記入してくれと言う。見ると書類は「入所者人的事項」という見出しになっていた。これもまた私を狼狽させるものだった。

「すぐ済むからと言うのでついてきたんですよ。何ですか、これは」

無駄だろうとは思った。だが、私はその青年にとにかくそう言ってみた。

「規則ですから……」

不愉快な思いで、私は本籍地だの住所、生年月日、電話番号、それに宗教という欄には「無」と書いてその青年に手渡した。青年は書面を受け取りながら何か別の書類に気を取られている様子で、私の顔もその書類も見ず事務的に「所持品を出してください」とつぶやくのだった。

「え？ 何のことです」

「所持品ですよ」

